園田浩一朗　論文内容の要旨

主論文

Evaluation of venous thromboembolism and coagulation-fibrinolysis markers in Japanese patients with inflammatory bowel disease
（炎症性腸疾患患者における静脈血栓塞栓症と血液凝固マーカーの検討）

Koichiro Sonoda, Satoshi Ikeda, Yohei Mizuta, Yoshiyuki Miyahara,
Shigeru Kohno

Journal of Gastroenterology 39: 948-954, 2004.

長崎大学大学院医学研究科新興感染症病態制御学系専攻
指導教授：河野　茂教授

緒言

Crohn 病や潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患は易血栓性疾患としては知られているが、その消化管外合併症として動静脈血栓症・塞栓症を臨床の場で経験することは稀である。血栓症の部位は圧倒的に静脈系が多いと言われているが、我が国において臨床的頻度などの検討の報告はない。今回、我々は、炎症性腸疾患における無症候性を含めた肺塞栓症、深部静脈血栓症の頻度と凝固線溶系分子マーカーの関連について検討した。

対象と方法

入院加療となった活動期の炎症性腸疾患連続 47 例（クローン病（CD）26 例、潰瘍性大腸炎（UC）21 例）の病型、重症度などを評価し、血液検査（WBC, Plt, CRP, fibrinogen, thrombin-antithrombin III complex (TAT), D-dimer）と、肺換気血流シンチ（V/Q scan)、Magnetic resonance venography（MRV）または下肢静脈造影を施行し、静脈血栓塞栓症の頻度や血栓を形成した群（血栓群）

と静脈血栓塞栓症を認めない群（非血栓群）の臨床背景や凝固線溶系分子マーカーの値について比較検討した。

結果

V/Q scan で mismatch を示し、肺塞栓症が考えられた症例は、全症例 47 例中 5 例（CD 2 例、UC 3 例）で 10.6%であった。MRV、下肢静脈造影で defect を認め、下肢静脈血栓症が考えられた症例は 5 例（CD 2 例、UC 3 例）の 10.6%であった。47 例中、肺塞栓症、または深部静脈血栓症の静脈血栓塞栓症は、8 例(17.0%)で、そのうち 2 例（4.3%）は両方を合併していた。血栓群/非血栓群間の比較検討では、年齢は 50.3±14.3/29.2±11.7 歳(p<0.0001)と血栓群で高齢であった。各疾患の臨床重症度では差はなかったが、UC の内視鏡分類では重症例が血栓群に多かった(p=0.0149)。血液データでは TAT 13.1 ± 17.7/5.3 ± 5.5ng/ml(p=0.0245)、D-dimer 964±1402/207±192ng/ml(p=0.0016)と血栓群でより凝固線溶系の亢進を認めたが、WBC、PLT、CRP、Fib は両群間で有意差を認めなかった。

考察

活動期の炎症性腸疾患で、無症候性を含めた静脈血栓塞栓症を高頻度にみとめた。静脈血栓塞栓症の予測因子としては高齢、UC における内視鏡分類の重症例が考えられた。また、非血栓群においても凝固線溶系の亢進を認めるが、高度の亢進の場合には、消化管外合併症としての静脈血栓塞栓症の存在の可能性を常に念頭におく必要があると考えられた。以上の結果は医療安全管理において深部静脈血栓症や肺塞栓症を考える場合、患者背景の評価として極めて貴重なエビデンスになると考えられた。